

青年期における基本的信頼感と対人関係(2)

Sense of Basic Trust and Peer-relationship in Adolescence (2)

弘前大学保健管理センター

田名場美雪・佐々木大輔・佐藤清子

I はじめに

1. 「基本的信頼感」とはなにか
2. 発達段階上の危機
3. 大学生の対人関係のもちかた
4. 仮説

II 方法

III 結果と考察

1. 結果
2. 考察

IV 事例の検討

Key words : sense of basic trust, Peer-relationship

I はじめに

問題に直面したとき、何かを決定しなければならないとき、私たちはなにをよりどころとするのだろうか。自らの過去経験と知識あるいは信念に照らし合わせたり、各種メディアやインターネットなどから情報を入手したり、信頼できる他者にアドバイスを求めたりする。そして、最終的に自分自身で決定する。たくさんの情報やアドバイスを手に入れたとしても、最後に取り捨選択するのは自分なのである。取り捨選択のよりどころとなるべき自分自身を信頼できなければどうなるだろう。決定することが困難になったり、決定しても不安感や不安全感につきまといられるかもしれない。「よりどころとなる自分」について、エリクソンの提唱した概念である「基本的信頼感」をもとに検討し、新入生全体の傾向と、来談者の傾向について探索的に検討する。

1. 「基本的信頼感」とは

発達の第一段階の危機「基本的信頼 対 基本的不信」は、乳児期に優勢になる心理社会的危機（個人の発達の欲求と文化の社会的期待とのあいだに生じる緊張状態）である。「基本的信頼感 (sense of basic trust)」の発生はその時期に由来し、生後一年の経験から獲得される自己自身と世界に対する一つの態度であり、他者に関しては筋の通った信頼、自己に関しては信頼に値するという単純な感覚を意味する。この基本的信頼感の影響はこの段階にのみ限定されるのではなく、その後の発達段階で、その傷つきという形ではっきりと輪郭を表すとされている。つまり、第一段階以降もその感覚は維持されている¹⁾。

従来の「基本的信頼感」尺度はエリクソンの呈示した概念を十分反映したものとはなっていないという批判があった。谷 (1996) は、従来の尺度を再検討した結果、基本的信頼感の中心的内容を示す「基本的信頼感」と、他者についての信頼感を表す「対人的信頼感」の2因子を抽出した²⁾。この

ことは、従来の基本的信頼感尺度が二つの異なる内容を測定していたことを示すものである。また、「基本的信頼感」は「対人的信頼感」に比べて、抑うつ傾向や特性不安と高い相関をもつことから「基本的信頼感」と「対人的信頼感」は基本的に異なる概念であり、識別して考慮する必要があることが示されている。さらに、「基本的信頼感」は「対人的信頼感」に比べて、自殺を考えた経験の有無とも高い相関をもっている（田名場、2000）³⁾。

つまり、「基本的信頼感」項目はエリクソンの呈示するものを反映していると仮定され、「対人的信頼感」項目はむしろ現実の人間関係に基づく感覚を測定する尺度と言える。そこで、本研究ではこの考えにそいながら、「基本的信頼感」と「対人的信頼感」を区別しながら検討し、実際の相談内容とどのような関連性をもっているのか探索的に検討する。

2. 発達段階上の危機

大学新入学生にとっての「基本的信頼感」の意味を考えてみる。青年期には「個人的同一性 対 役割拡散」という心理社会的危機を迎える。そして、前述した第一段階の危機の問題は青年期には同一性の危機に伴って「時間的展望 対 時間的展望の拡散」として顕在化する。すなわち、青年期においては、乳児期以来形成されてきた基本的信頼感の程度が、それまでの自己の時間的連続性の統合の程度に非常に深く関わるのである。「これまでも、まさに現在も、これからも、私は私であるという感覚をどの程度もてるのか」は基本的信頼感を基礎にしてなりたっていくのである。したがって、「基本的信頼感」の低さが「時間的連続性」の低さとなって現れる場合、その人は精神的不安定さや現実場面でのなんらかの困難さをかかえることが想定される。

3. 大学生の対人関係のもちかた

青年期は、自己への理解の深まりと、親密な友人関係への希求がその特徴としてあげられる。すなわち、両親への無意識の同一視が失われ、これによって不安定になった自己を安定化させるために親密な友人関係が求められるというものである。そしてこれがその後の青年の人格形成に大きな役割を果たすことが強調されている。そしてたいていの場合、同性の友人との親密な関係が異性との親密な関係形成に先行する。このように青年が新たな自己像を形成するにあたっては、自分自身への関心の高さ、友人関係の親密さといった様相が大きく関与していると考えられてきた。

しかし、相談場面で、自他を傷つけることを恐れて、学生が相手との関わりと表面的なものにとどめる傾向が指摘されたり（岡田、1993）⁴⁾、対人場面での傷つきへの恐れから対人関係へのコミットを避け、その場の雰囲気によければよいとする傾向がある。実際、当大学での来談者にも「広く浅くの対人関係は得意であるが、それ以上はどのようにつきあっていいのかわからない」という悩みを抱える者は少なくない。このような現実場面での対人関係を回避する傾向は、「対人的信頼感」の低さと関連すると推測される。

4. 仮説

以上から次の仮説を検討する。

①基本的信頼感は同一性の感覚の中核をなすと考えられる自己の時間的連続性の感覚とより密接に関わる。

②対人的信頼感は現実の人間関係に関連するので、対人関係回避傾向との関連が高い。

なお、来談者については、仮説を検証するのではなく、探索的に検討を加えるものとする。

Ⅱ 方 法

全新入生に対して郵送法による質問紙調査を実施した。詳細は以下のとおりである。

①調査対象者：弘前大学の人文学部・教育学部・医学部・理工学部・農学生命科学部、および医療技術短期大学部の平成12年度新入生1445名（男子748名、女子697名）、分析対象者は1425名（男子732、女子693名）である。

②調査方法：郵送法による記名式の質問紙調査である（回収も郵送で行った）。

当大学合格者には入学手続き書類等と共に保健管理センターからの『健康調査書』が送付されるが、この一部を使用した。使用した尺度の概念は表1のとおりである（質問項目の詳細は付表参照）。「基本的信頼感」「対人的信頼感」「時間的連続性」「対人関係回避傾向」尺度全質問項目に対して、評価はいずれも0（あてはまらない）から5（あてはまる）までの5件法によっている。

表1 使用した尺度の概念

「基本的信頼感」尺度	自己についての信頼感
「対人信頼感」尺度	他社についての信頼感
「時間的連続性」尺度	自己の時間的連続性の結合の程度
「対人関係回避」尺度	対人関係へのコミットを避ける程度

③調査時期：調査は平成12年3月末から4月初旬にかけて実施した。統計的解析についてはSPSSを使用した。

Ⅲ 結 果

1. 結果

各尺度についての全回答者および男女別の傾向をみてる（表2、表3参照）。

「基本的信頼感」尺度には男女間に有意な差はみとめられなかった。「対人的信頼感」尺度では、女子が男子よりも高く、「時間的連続性」尺度では女子が男子よりも高く、「対人関係回避傾向」尺度では男子が女子よりも高いという性差がみとめられた。

次に各尺度間の相関をみてる。表4に示すとおり、「基本的信頼感」「対人的信頼感」「時間的連続性」「対人関係回避傾向」の間においてすべてに有意な相関（ $p<.001$ ）がみとめられた。特に、「基本的信頼感」と「時間的連続性」との相関が高く（ $r=.57$ ）、「対人的信頼感」と「時間的連続性」の相関（ $r=.33$ ）よりも強いものとなっている。このことは、「基本的信頼感」と「対人的信頼感」とは本質的には異なるものである可能性を示している。「対人関係回避傾向」は、「対人的信頼感」との相関がより高く、「対人的信頼感」は現実の人間関係を反映していることを示している。

表2 各尺度の平均と標準偏差

	全体 (N=1425)	男子 (N=732)	女子 (N=693)	男女間比較 (t)
基本的信頼感	15.72 (4.85)	15.86 (4.89)	15.98 (4.80)	1.17
対人的信頼感	14.25 (3.46)	13.61 (3.65)	14.88 (3.11)	**7.33
時間的連続性	17.41 (4.02)	17.03 (4.03)	20.02 (3.98)	**3.61
対人関係回避傾向	7.04 (4.73)	7.66 (4.89)	6.83 (4.46)	**5.12

注) ** $P<.001$

表3 各尺度における性差

「基本的信頼感」尺度	男子＝女子
「対人的信頼感」尺度	男子＜女子
「時間的連続性」尺度	男子＜女子
「対人関係回避傾向」尺度	男子＞女子

表4 各尺度間の相関

	基本的信頼感	対人的信頼感	時間的展望
対人的信頼感	** 0.33		
時間的連続性	** 0.57	** 0.32	
対人関係回避傾向	** -0.31	** -0.49	** -0.32

注) ** $P < .001$

2. 考察

青年期におけるアイデンティティを考える上での重要な概念「基本的信頼感」「対人的信頼感」「時間的連続性」のうち、「基本的信頼感」には男女差がなく、「対人的信頼感」「時間的連続性」には男女差がみとめられたことは何を意味するのであろうか。「基本的信頼感」は、発達のごく初期にその源泉をもつといわれており、人の発達にとってきわめて本質的なものであり、多くの場合、性による影響をほとんど受けないと考えてもよいだろう。

性差がみとめられた「対人的信頼感」「時間的連続性」は、発達の各段階で顕現してくるものであるが、その内容そのものには男女差があるはずである。なぜならば、たとえ各段階での発達課題が男女に同等であっても、男女両性では同じ状況が異なった様相をもって立ち現れてくる（氏原，1990）⁵¹ からである。たとえば文化や社会によって男性・女性に要求される役割行動が異なることや、身体的発達の男女差が心理面の発達へ影響を及ぼすことも考えられるのである。

同じように「対人関係回避傾向」は、現実場面への対応をあらわすので、男性・女性をとりまく状況の差異と、期待される役割行動の差異から、男女差が出てきたと説明できるのではないだろうか。

「基本的信頼感」と「時間的連続性」との相関はきわめて高いものであった。青年期の課題として「時間的連続性」が重要であることが伺われる。そして、「基本的信頼感」と「対人的信頼感」とは本質的には異なるものである可能性を示している。「対人関係回避傾向」や「対人的信頼感」は現実の人間関係を反映するものであり、「基本的信頼感」と「時間的連続性」は、より基底的な部分、いわゆるアイデンティティにかかわるものである。

IV 事例の検討

質問紙調査の結果をふまえながら、実際に来談した新入生の得点パターンと相談内容等との関連を検討し、質問紙調査を相談サービスへ生かす方法を模索したい。

相談に訪れた新入生（12年4月1日から同年12月22日まで）のうち、匿名希望の来談者を除いた来談者数は19名（男子8名、女子11名）。質問紙調査の得点パターンの特徴ごとにその相談内容をみていく。その際、尺度の内容の性質上「基本的信頼感」の低さ、「対人的信頼感」の低さ、「時間的連続性」の低さ、「対人関係回避傾向」の高さが問題となってくる。

4つの得点のパターンから、19事例は、3つに分けることができる。

①特に問題のない得点パターンを示した事例（10例）

②対人関係回避傾向の強さが特徴的な事例（2例）

③基本的信頼感の低さが特徴的な事例（7例）

以下、順に検討していく。なお、プライバシー保護のため事例の性別等は省略する。

（1）特に問題のない得点パターンを示した事例（10例）

4つの尺度得点とも平均点前後を示している。得点上は顕著な特徴を示さない事例である。その相談内容をみると、来談者自身の特性等が主な相談内容になっているものとそうでないものと、大きく二つに分けることができる。

①相談内容と本人の特性や行動パターン等とは直接的な関連が推測されない事例（6事例）

事例1 家族に生じた重大な問題についての相談。相談の内容はきわめて深刻なものであったが、本人の特性や行動パターン等とは直接的な関連はみとめられないと思われる。

事例2 同性の友人に生じた重大な問題についての相談。相談の内容はきわめて深刻なものであったが、本人の特性や行動パターン等とは直接的な関連はみとめられない相談と思われる。

事例3 日常生活でのトラブル（インターネットでのトラブルなど）の相談。日常生活の様子の報告など、気軽なおしゃべりが大半を占める。

事例4 自分の言動の傾向（思ったことをすぐに口にする）とどのようにつきあったらよいか、初めて暮らす土地の風土や環境・文化への戸惑い、大学での講義やカリキュラム、同級生たちへ感じているフラストレーションについての相談。

事例5 大学入学に伴い物理的に離れることになった異性の友人とつきあい方についての相談内容。

事例6 転学部について、自分以外にもそのような希望をもっている学生がいるのかどうかという相談内容。

②相談内容と本人の特性や行動パターン等と直接的な関連が推測される事例（4事例）

以下の事例は、得点パターンは①と同様にきわめて平均的あるいは健全である。ただし、得点パターンそのものからは相談内容やその深刻度をまったく推測できない事例であり、事例9と事例10は相談継続中である。

事例7 不本意入学であることや、集団生活での人間関係に苦心することから過食してしまったという相談内容。

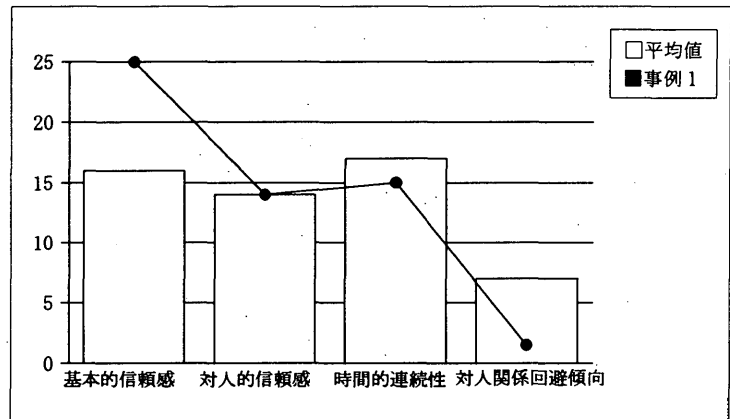


図1 特に問題のない得点パターン（事例1）

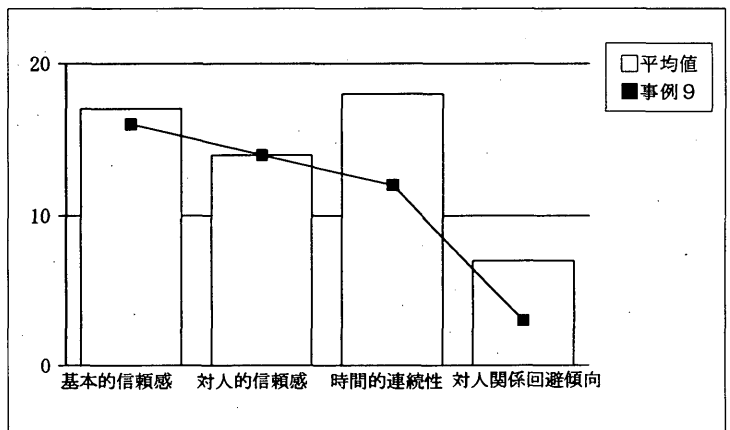


図2 特に問題のない得点パターン（事例9）

事例8 大学入学前に過食経験あり。大学入学に伴う生活環境等の変化から、また過食を繰り返してしまうのではないかとという相談内容。

事例9 入学前から悩まされている心身症とつきあいながら、大学生活をどのように過ごしていくのかについての相談。日常生活の様子など報告されている。受診歴あり、現在も治療中である。相談継続中。

事例10 大学入学前から感受性の高さに戸惑うことが多かった。入学後、神経症的な行動に悩まされる。受診をすすめ、現在治療中である。相談継続中。

(2) 対人関係回避傾向の強さが特徴的な事例 (2例)

対人関係回避傾向の高さが相談内容に反映していると考えられる事例である。

事例11 集団生活での対人関係（特定の他者との関係）で疲労している、どのように生活したらよいかという相談内容。心身症的な症状が訴えられたので、受診をすすめる。対人的信頼感も低い傾向がある。

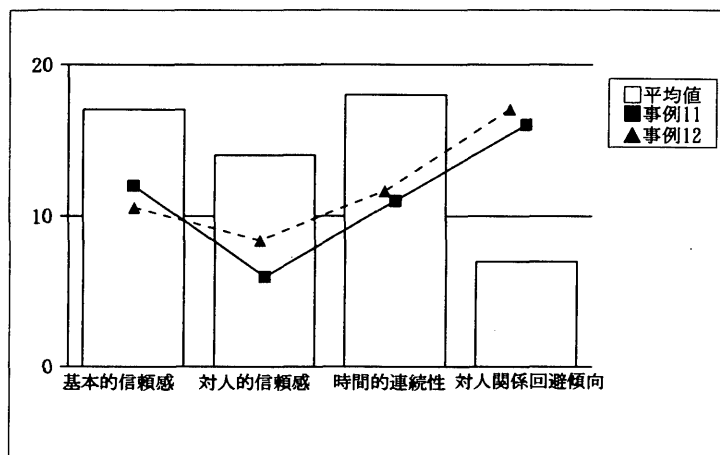


図3 対人関係回避傾向の強さが特徴的な得点パターン (事例11・12)

事例12 集団生活での対人関係（不特定多数の他者との関係）で疲労している、他者と一緒に食事するのが苦痛であるという相談内容。

(3) 基本的信頼感の低さが特徴的な事例 (7例)

7例とも基本的信頼感の低さが相談内容に反映していると考えられる事例である。

事例13 大学入学前に精神病と診断され治療継続中であるが、集中力・思考力に不安があるという相談内容。その劣等感から、「普通の人たち」とつきあう価値のない人間ではないだろうかと考えてしまうことがある。時間的連続性も低い。基本的信頼感と時間的連続性が共に低いことから、アイデンティティの不安定さが推測できる。

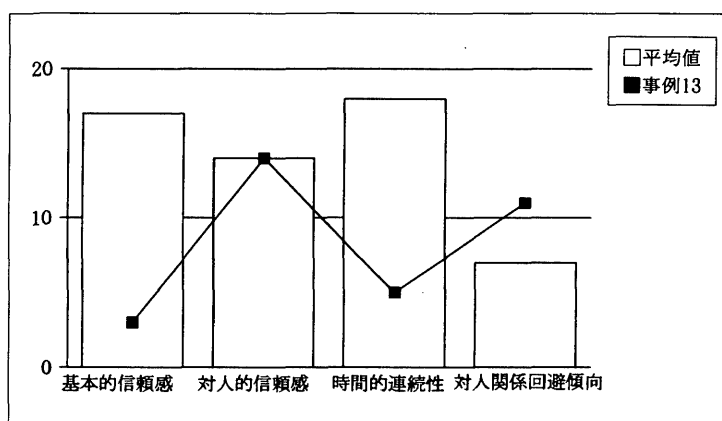


図4 基本的信頼感の低さが特徴的な得点パターン (事例13)

事例14 常に孤独な感じがする、一人でいると不安、他者と一緒にも見捨てられるのではないかとという不安につきまといわれる。自分が何を考えているのかわからないときがあるという相談内容。対人的信頼感も低いことから、見捨てられ不安が非常に強いのではないかと推測できる。

事例15 幼い頃から家庭内の問題に巻き込まれてきた、家を出たいがどうすればよいかという相談内容。対人的信頼感も非常に低く、対人関係回避傾向も非常に高い。

事例16 神経症、受診をすすめる。対人関係回避傾向もやや低い。

事例17 小・中・高と自分の外見に劣等感をもっていた。大学入学後は、努力して外見を整え人並みになったと思うが、自信がもてない、異性から告白されても信じていけないという相談内容。

事例18 過去に、意図的に対人関係をシャットアウトしていた。入学後、再度、対人関係をもとうとしたら、できなくなっていた、他者と共にいるのが苦痛に感じるという相談内容。対人的信頼感もやや低めである。

事例19 家庭内に問題があり、そのことで頻繁につらい記憶がよみがえり、虚しく淋しい気持ちにおそわれるという相談内容。対人的信頼感もやや低めである。

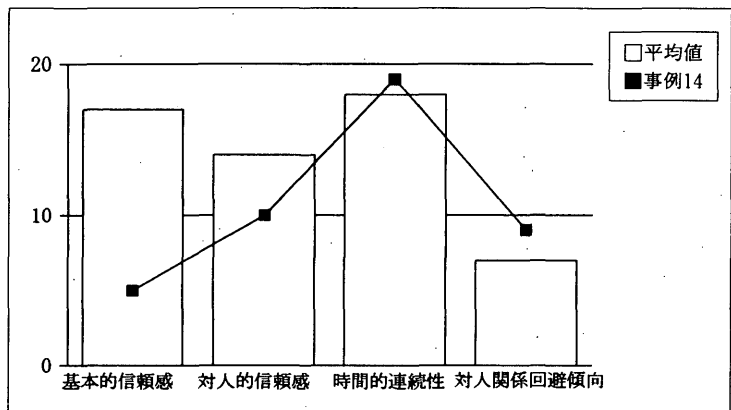


図5 対人関係回避傾向の強さが特徴的な得点パターン (事例14)

平均的な得点パターンを示す事例の場合の相談内容には、進路やコンサルテーション、日常生活についてが多い。なお、相談内容と本人の特性や行動パターン等と直接的な関連が推測されない6事例（事例1から事例6）は、現在までのところ初回面接のみであった。相談事例の約3分の1を占めるこれら事例は、いわゆる心理相談とは性質を異にする相談内容であり、アドバイスや情報を与えたり話し合って方法を探すという対応をとった。

ただし、得点パターンがただちに相談内容に反映しているわけではない。得点パターンにはなんら問題はなくても、事例7から事例10のように本人の特性や行動傾向そのものが相談内容になっていることもある。また、事例9や事例10のように、相談内容の深深度が強かったり、治療が必要であったり、相談も継続し長期にわたる可能性のある場合もある。

対人関係回避傾向が強い来談者の場合、その相談内容も現実の対人関係をめぐるものであった。対人的なトラブルに巻き込まれたり、対立しているというよりも、どのように対面したらよいのかわからずに「一人で当惑している」というものであった。対人関係回避傾向の強い者が下宿や寮などで複数の他者と日常生活行動を共にしなければならない場合、その負担感は大きく、疲弊されるものと考えられる。対人関係を回避したいのに集団生活を送ることを余儀なくされている事例であり、現実場面でのストレスを緩和することが必要となる。

基本的信頼感が低い来談者の相談内容は、同一性にかかわる不安全感や、幼い頃からの家庭内の問題につながるものや、病理レベルのものなど、深刻なものとなっている。したがって、継続中のものが多い。現実場面での問題が解決しても、不安全感が残り、何度も来談することが多い。相談を通して自己の成長をはかっているものと思われる。

「基本的信頼感」の低さ、「対人的信頼感」の低さ、「時間的連続性」の低さ、「対人関係回避傾向」の高さが、来談者の理解に際してのある程度の指標になることが推測できる。今後、事例の積み重ねによって検討を続けたい。

参考文献

- 1) Erikson, E. H: Identity and the life cycle Universities Press, Inc. 1959 (小此木啓吾訳編「自我同一性」1973 誠信書房)
- 2) 谷 冬彦: 青年期における基本的信頼感と時間的展望. 発達心理学研究, 第9巻, 第1号, 35-44, 1998
- 3) 田名場美雪: 新入生における基本的信頼感と対人関係. 弘前大学保健管理概要 第21号, 11-15, 2000
- 4) 岡田 努: 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係・発達心理学研究, 第4巻, 第2号, p162-170, 1993
- 5) 氏原 寛ら共編: 現代青年心理学: 男の立場と女の状況 培風館, 1990

付表 使用した質問項目 (※は逆転項目)

「基本的信頼」尺度

- ※・物事がうまくゆかなくなると, 自分の中にひきこもってしまうことがある。
- ※・自分自身のことが信頼できないと感ずることがある。
- ※・人から見捨てられたのではないかと心配になることがある。
- ※・人生に対して, 不信感を感じることがある。
- ※・失敗すると二度と立ち直れないような気がする。
 - ・私は自分自身を十分に信頼できると感ずる。

「時間的連続性」尺度

- ※・今の自分は本当の自分ではないような気がする。
- ※・私は過去の出来事にこだわっている。
 - ・今の生活に満足している。
- ※・過去のことはあまり思い出したくない。
- ※・毎日が同じことのくり返しで退屈だ。
 - ・私は自分の過去のことを受け入れることができる。
- ※・私の過去はつらいことばかりだった。

「対人信頼感」尺度

- ・自分が困ったときには, まわりの人々からの援助が期待できる。
- ・普通, 人はお互いに誠実にかかわりあっているものだと思う。
- ・一般的に, 人間は信頼できるものであると思う。
- ・周囲の人々から自分が支えられていると感ずる。
- ※・私には頼りにできる人がほとんどいない。

「深い関わり回避」尺度

- ※・おたがいに, 心を打ち明け合う。
- ※・人間の生き方などについて真剣に話し合うことがある。
- ※・友だちと精神的に深い関係をもちたい。
 - ・友だちと真剣に議論することは恥ずかしいことだ。
 - ・友だちには自分の本心は見せない。
 - ・友だちとはあたりさわりのない会話ですませている。
 - ・友だちと意見が対立するのが怖い。